

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

ウズベキスタンのコリョサラムの移住
及びホスト社会における適応
—ロシアと韓国における事例の比較研究—

氏 名

CHAGAY Alena

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、ウズベキスタンの少数民族の1つであるコリョサラム(独立国家共同体(以降 CIS)のコリアン)を研究対象とし、彼らのポスト・ソビエト時代における国外移住の特徴及びホスト社会での社会適応していく過程を考察した。とくに、主要な移住先であるロシア連邦と近年、移住が増えている大韓民国の事例の比較分析を、「人的資本」「社会関係資本」「クオリティーオブライフ」という概念を用い行った。

本論全体は5章から構成し、第1章では、1937年の強制移住からのウズベキスタンにおける歴史的な背景を通してコリョサラムの社会的な役割と状況を考察し、本論文と関連のある先行研究を概観した。

第2章において、ウズベキスタンの独立に伴うコリョサラムのロシアと韓国の首都圏への移住パターンや移住の原因をプッシュ・プルファクターの枠組みの中で明らかにした。

ソ連崩壊後の経済・政治的混乱期のプッシュ・プルファクターとの相互作用の他に、コリョサラムの独特な民族性と歴史的なバックグラウンドが移住の決断に影響を与えた。コリョサラムの民族性を特徴付ける諸要素をTae(2001)、李(2002)、Kim G. N(2006)などと筆者の現地調査のデータに基づいて明記した。その特徴は「全社会階級における強い民族結束力の精神」「教養レベルが高いことなどで現れる勤勉さと成功への強い意向」「都市化や社会的流動性の強い傾向」「ウズベキスタンの市場経済への移行時の商業活動への素早いシフトなどで現れる適応能力」である。つまり、コリョサラムは社会的流動性のある、外的状況によって従事する分野を切り替えることができるため、独立後に伴うウズベキスタンにおける一連の変化に素早く適応する性質を持っているといえる。その適応の方法の1つとして海外移住だと判断し、強い民族的結束力によってロシアと韓国への移住が促進されるとした。

なお、現地調査は筆者によって韓国とロシアの首都圏において、それぞれ2010年11月と2011年9月に、2回にわたり行われた。

プルファクターとして、ロシアへの移住の際に、「高い生活水準」「教育の機会」「家族統合」という経済・社会的要因の他に、「抑圧された人々の復権について」、「ロシア国籍の取得の簡易手続きの応用

"という政治的な要因となる移民政策となったことを明らかにした。

一方、韓国へのプルファクターとして、血縁的民族の自覚の高揚という要因の他に、政治・社会・経済的な要因について考察し、その中での韓国への移住の体系は「出稼ぎ」「留学」「国際結婚」が多いことが分かった。それらのすべての社会的現象にはコリョサラムが韓国の在外同胞者であることが貢献していると言え、在外同胞者として韓国で働くチャンスが設けられ、韓国が多くのコリョサラムを惹き付ける国となった。しかし、ウズベキスタンの独立直後にコリョサラムの韓国への「逆流帰還」の現象が見られず、それは以下の2つのことから起因するものであると説明した。

1つ目はコリョサラムが他の在外同胞者との比較において韓国への精神的距離が比較的遠く、韓国への文化的定着が希薄であるためである。

2つ目は韓国への移住のルーツが作られていなかったためであると考えられる。韓国には移住を援助できる韓国在住の親類がおらず、韓国側からも CIS 在外同胞者向けの受け入れ政策が2007年に、ウズベキスタンが独立してから16年も経ってからはじめて実施されたのである。

第3章で、まず、コリョサラムの「人的資本」の形成過程を究明するために、1937年から旧ソビエト政権下にあったウズベキスタンのコリョサラムの実情について説明している。そして、ウズベキスタンで居住する間に社会にどのように適応し、どのような社会的地位を獲得したのかななどを論考し、コリョサラムに培われた「人的資本」を考察している。コリョサラムの「人的資本」を構成する諸要素を「ロシア文化への同化・ロシア語の言語能力」「学歴・職歴・技能」「素早い適応能力」「身体的特徴」とし、それらの要素はロシアと韓国へ再移住する際には如何なる役割を果たすのか明らかにした。

その結果、両方のホスト社会においてコリョサラムが持っている「人的資本」は重要な役割を果たし、適応していく過程において意外な一面で活用されたり、逆に不利となったりすることが明らかになった。その一例として、コリョサラムのアジア人の「身体的特徴」という「人的資本」を見ると、民族的差別が緊迫の問題となるロシアへの移住の際、多くの場合不利に働いている。その一方で、そのアジア人の外見を生かし、日本の料理店で雇われ、ロシアへの移住を容易にできたコリョサラムも少なくないのである。

一方、韓国では多くのコリョサラムは「学歴・職歴・技能」のような「人的資本」を活用できる機会が限られ、自分の能力を発揮できず、専門とは無縁の仕事を選ばざるを得ないケースが多いことが分かった。韓国への移住は経済的な特色を持ち、一時的な出稼ぎ労働者が多い。それにもかかわらず、韓国で生活を体験したコリョサラムの多くは、韓国における定住を希望し始めているという社会的動向が見られる。

しかし、韓国の場合では「ロシア文化への同化」という「人的資本」はプラスの面も持っており、「多文化授業」の教師などとして自分の文化的背景を生かし、仕事を見つけたコリョサラムもいることが分かった。

コリョサラムの「人的資本」の役割の相違に2つのホスト社会の構造的な特徴が直接的に関わり、両ホスト社会への移住を促進させるのは移住先における高い労働力の需要である。ウズベキスタンと同じような社会構造を持っているロシアの社会へ浸透し易く、「クオリティーオブライフ」の向上のために「人的資本」の諸要素が何らかの形で活用されることが分かった。そして、ロシアへの、特に旧ソ連当初の移住は政情的な特色を持っており、ソ連の解体を促したポストコロニアル地域に見られる

自然分布の現象であると述べた。

第4章で、Bourdieu P., Coleman J.などの定義を中心に、近年盛んに議論の対象となる「社会関係資本」という概念の観点からアプローチし、ロシアと韓国のホスト社会においてコリョサラムによって形成される「ネットワークの特徴」を究明した。その中で、Putnam R.D. (1993, 2000) がいう「垂直的な」または「水平的な」ネットワークにおける「信頼の度合い」を比較した。Granovetter(2006)、Lin(2005)のネットワークの特徴の1つである紐帯（人間関係）の強弱の違いによって「見返り」も異なるという見解に基づいて、コリョサラムのホスト社会において形成されるネットワークへの参加によって期待される「見返り」について明らかにした。

コリョサラムが自らの「クオリティーオブライフ」を向上させるために、ロシア在住の親戚と家族統合を成し、ロシアへ移住したコリョサラムが少なくないことが分かった。コリョサラムはロシアにおいて「親族的な繋がり」に基づくネットワークを形成し、ロシアでは問題となる官僚的な壁を乗り越えるために「人間関係資本」を活用している。韓国との比較において、コリョサラムの居住体系は広域にわたっており、その分布はまばらである。密度の薄い居住体系が「開かれたネットワーク」を形成し、その中の人間関係も薄く、弱いものである。また、ロシアの社会ではコリョサラムが多種多様な社会的階層に属し、信頼度が低い垂直的な人間関係が生じやすいものである。このような特徴を持っているロシアにおけるネットワークの「社会関係資本」の活用はホスト社会への適応のために重要ではなく、居住登録などの際に、移住初期の段階のみで活用されることが多い点が明らかとなった。

一方、韓国ではコリョサラムの移住と共に社会的地位の同等化が生じ、形成されるネットワークにおいて水平的な人間関係が生じる。その人間関係では信頼度が高く、お互い情報の交換や自身の問題の共有などを通して、情緒的・精神的サポートなどが得られるネットワークが形成される。そのネットワークが形成され始めたのは独立後であり、最近では家族の成員を呼び寄せて、家族ぐるみで韓国に住んでいるコリョサラムもいることが分かった。

第5章で、二つのホスト社会において適応がどれだけ進んでいるかを検討するために、「クオリティーオブライフ」の測定基準を用いて、ロシア、韓国と出身国であるウズベキスタンでの居住環境と労働条件などを評価し、比較的分析を行った。そのため、ウズベキスタンとホスト国との比較において日常生活に密着している「公共サービス」「医療サービス」「自分の経済状況や収入」「職種」「キャリアの可能性」「安全性」「安定感」「子供の教育や社会活動の可能性」「食生活」「レジャー」という10の要素に対する満足度の分析を行った。

ロシアに移住したコリョサラムは「職種」に対して、「安全性」「医療サービス」「食生活」に次いで、ウズベキスタンより低い満足度を表した。しかし、他の「子供の教育や社会活動の可能性」「安定感」「キャリアの可能性」「自分の経済状況や収入」「公共サービス」「レジャーの質」6つの項目が高く評価され、ロシア首都圏に移住したほとんどのインフォーマントは、自分の「クオリティーオブライフ」が向上したと自覚している。韓国に移住したコリョサラムについても同じことが言え、「職種」以外の全項目に対する満足度はウズベキスタンに居住したときの満足度より高く評価された。

両ホスト社会への移住が「職種」の変化を伴うことが多く、ウズベキスタンで従事していた仕事の方が、満足度は高いことを明らかにした。特に韓国の場合、「職種」の変化によってコリョサラムの社会的地位が下がるのである。しかし、収入がウズベキスタンに居住したときより遥かに上昇し、コリ

コリヨサラムはウズベキスタンで、Nieswand（2011）が定義した「象徴的な中流階層」（symbolic representation of middle-class status）に入ることが可能となる。その結果として、Nieswand（2011）がいう「心理的埋め合わせ作用」（“the compensatory psychological function”）が働き、ホスト国での仕事の内容に妥協し、「クオリティーオブライフ」を向上させるために海外移住するコリヨサラムが増加する一方であることが説明できる。

結論では、序論において三つの仮説を立てたものを、本論を通じて明らかとなった結果をまとめた。

コリヨサラムはより豊かで、より良い収入の仕事や自分と自分の家族がさらに良い「クオリティーオブライフ」ができるような環境を追い求め、真面目で、勤勉に努力し続け、ロシアまたは韓国に移住する。ホスト国における「社会関係資本」と「人的資本」をそれぞれ活用し、新たな活躍の場を作る。

ロシアと韓国の中では、ロシアへの適応はロシアの社会制度がウズベキスタンのものと類似し、公用語がコリヨサラムの母語であるロシア語のため、より容易であると仮定したものの、ロシアにおける少数民族にとっての不安定な社会情勢はその過程を困難にすることがある。すなわち、ロシアに存在する移民恐怖症といったコリヨサラムにとって望ましくない社会的環境はロシアへの移住に歯止めをかけ、さらにロシアからの再移住に働きかけている。

一方、韓国ではコリヨサラムの移住者が年々増え続け、ウズベキスタンの社会と本質的に異なるホスト社会において言語の問題をはじめ、あらゆる社会的問題に遭遇し、それを乗り越える必要がある。しかし、コリヨサラムはそもそも同じ朝鮮半島からの子孫であり、韓国の文化に第2世代から完全に統合できると考えられる。以前居住していた社会で起きた一連の変化を乗り越えたコリヨサラムは新しい社会への適応力に優れ、若い移住者や中年の移住者も、韓国の文化や生活様式に素早く適応し、韓国へのホスト社会へ統合が早く進むであろう。

自分にとってウズベキスタンより「クオリティーオブライフ」の良い社会であるロシアと韓国で、移住している第1世代は様々な困難に遭遇しながら、「人的資本」と「社会関係資本」を活用し、適応している。しかし、それぞれの受け入れ社会が移住を決意したコリヨサラムにとって新しい故郷となる可能を秘め、ウズベキスタン、ロシア、韓国に跨って、活躍しているコリヨサラムの姿が目立つ。